OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 国民化を通じて先住市民をつくる : ボリビア・コムニダにおける農村教師の教育実践の人類学的考察 |
| Author(s) | 大橋, 美晴 |
| Citation | 大阪大学, 2012, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/24527 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

| | |
|---|---|
| 氏名 | 大橋美晴（おおはしみはる） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（人間科学） |
| 学位記番号 | 第　25603　号 |
| 学位授与年月日 | 平成24年9月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当<br>人間科学研究科人間科学専攻 |
| 学位論文名 | 国民化を通じて先住市民をつくる<br>－ボリビア・コムニダにおける農村教師の教育実践の人類学的考察－ |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教授　中川　敏<br>（副査）<br>教授　小泉　潤二　　教授　栗本　英世　　准教授　森田　敦郎 |

## 論文内容の要旨

本研究の目的は、ボリビアの農村地域において、国家がつくる学校が、二重の役割を果たしていることを示すことにある。ひとつは、農村と都市を空間的、政治的、経済的に二分し、支配－従属構造をつくり出す国家イデオロギー装置としてのはたらきである。もうひとつは、農村で生活する先住民にとっての国家イデオロギーへの交渉・運動・抵抗の重要な媒体としてのはたらきである。本研究では、学校が持つ二つの対立・矛盾する役割がどのように生じ、関わっているかを、農村の学校ではたらく教師の教育実践を記述することで明らかにする。制度を通じ、国の植民地主義的支配の維持・再生産にはたらく国家イデオロギーに対し、人々がどのように制度の中の現実を理解し、関わっているかを見ていく。

ボリビアの農村のコムニダにつくられる学校は、制度を通じ、農村と都市を空間的に二分し、政治・経済的境界をつくる――すなわち植民地主義的支配を維持・再生産する――国家のイデオロギー装置としてはたらく。カチャリにつくられる学校とインテルナードは、村に都市近代的時空間を開くことで、コムニダの人々の農牧業に基づく生活を変えようとはたらいている。学校が持つ都市近代化のはたらきは、農村と都市の間に均質的な時空間を広げることで文化的境界をなくすようはたらくが、同時に、農村空間を「他者」として位置づけ、人々の認識上での農村／都市の空間的境界を維持・強化している。

学校が持つ都市近代化のはたらきで重要な役割を担っているのがコムニダの学校とインテルナ

ードではたらく農村教師である。教師たちは、国やNPOから派遣され、人々の「悪い」習慣を変え、都市の市民的価値を教える役割を持つ。同時に、彼らがコムニダではたらくには人々からの協力と理解が必要であり、時にはコムニダの「悪い」文化や習慣を受け入れなければならない。国家の教師としての立場から教師たちが促す都市の市民的な習慣・文化・価値は、時には農牧民として生きるコムニダの人々の習慣や文化との対立、食い違いを生じさせている。教師たちの教育実践は、国家とコムニダの交渉によって生み出されている。教師たちは必ずしも国家プログラムのもと、先住民を「国民」へと変えているわけではない。

さらに、教師たちが置かれる国家とコムニダの間という曖昧な立場は、農村教師たちの「国民化」を促す教育実践と、先住「国民」を生み出す国家イデオロギーとのずれを生じさせている。教師たちは自身が持つ教育経験と学校の役割の認識から、農村と都市の空間的、政治的、経済的二分化にはたらく国家イデオロギーに対し、その二分化を越えようとはたらいている。

教師たちの教育実践におけるずれ——国家イデオロギーが作り出す政治・経済的境界を越えるはたらき——は、国家イデオロギー装置としての農村の学校が持つ政治・経済的に従属的地位へと置く先住「国民」を生み出すはたらきに対し、農村と都市の空間的、政治的、経済的境界を越える「市民」であると同時に、文化的境界を維持する「先住民」としての「先住市民」を生み出している。

## 論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、ボリビアの先住民の共同体コムニダ（「農村地域」）に国家がつくる学校が、二重の役割を果たしていることを示すことにある。

第1章は本論文で扱われる問題の設定に費やされる。すなわち農村教員のもつ二重性、両義性の問題である。一方に、先住民たちを支配へと組込むために文化的な一元化を図ろうとする支配層による目的がある。具体的にはスペイン語を普及させることを目的とする教育の道具としての学校である。言語的には一元化しながら、支配者層と先住民とを空間的・政治的・経済的に二分したまま支配／従属構造を保とうとするイデオロギー装置としてのはたらきが、学校に期待されているのである。

もう一方で、学校は、農村で生活する先住民にとっての国家イデオロギーへの交渉・運動・抵抗の重要な媒体としてのはたらきをも持つ。学校の教師は、言わば、支配者層と政治・経済的に対等に対応できる先住民を創ろうともしているのである。

本研究は、学校が持つ二つの対立・矛盾する役割がどのように生じ、関わっているかを、農村の学校ではたらく教師の教育実践を記述することで明らかにしていくのである。

第2章はこの論文の舞台となる「カチャリ」と呼ばれるコムニダ（先住民共同体）の民族誌である。じっさいの家族の一日を描写する中で、コムニダの生業（農業、牧畜、手工業、商業）が綿密に記述されていく。労働力と生産物の交換に参加すること、それが「コムニダの成員となる」ことが示される。

第3章は、そのようなコムニダに配置される教員を描く。彼女らがコムニダに持ち込む都市的空間、都市的時間が、前章で描かれる「伝統的」コムニダの時空間と大きく異なったものであることが強調される。この章で描かれる教師は、国家のイデオロギーを運ぶ尖兵たちである。

第4章では、教員像はより深くなる。じっさいのある教員の一日の描写から始まるこの章は、外部者であり、そして内部者でもある教員の両義的な立ち位置、国家の尖兵としての教員と、同じ先住民出身であることからコムニダの住民を助けようとする教員の二つの立場に板挟みになる教員の姿を、著者は暖かい目で描いていく。

第5章では、教員の二重性を作ってきた国家の教員養成制度に目が向けられる。先住民を二級国民として留めるために、いわば先住民の中から二級教員が作られていったさまが歴史の中に描かれる。そのようにして作られていく教員のジレンマが、教員のライフストーリーを通じて描かれていく。

最終章では、先住民を二級国民、あるいは差別された国民ではなく、「区別された市民」、著者の言葉を使えば「先住民市民」にしていこうとする農村教員の努力が、国民の祝日、ある年の「先住民の日」の描写を通じてビビッドに描かれる。さらに都市に住む先住民のあたらしい戦略、かつての垂直統御の発展形としてのコムニダから「都市テリトリー」への拡大が描かれる。

著者は、一貫して、農村教師たちの位置の両義性、その実践に見られる両義性に着目する。論文は、その両義性の中で、彼女らが、国家イデオロギーに巻き込まれながらも、コムニダの人々を二級国民としての「先住民国民」ではなく、文化的境界を維持する「先住民市民」としようとする努力を描いている。

本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。